

病診連携をはじめとするICT活用等、通所介護や在宅医療、介護支援やレスパイト施設、介護してる人たちが休みをとれるように支援してくれる施設です、の充実が立ちおくらせています。

対馬市の計画では、特養等の新設が掲げられていますが、この今言ったICT活用とそれから通所施設等の充実、優先度について、市長はどのように考えていらっしゃいますか。お金を使うとするならば、特養をすぐにつくったほうがいいのか、こういう通所施設等を先につくったほうがいいのか。

○議長（堀江 政武君） 市長、財部能成君。

○市長（財部 能成君） それにつきましては、内部でも論議が分かれたところがございます。最終的に市民の方たちの待機者の数が百数十名に、全部で320名ぐらいに及ぶわけですが、その数、そして介護度合い等々を考えたとき、特養が今一番待ち望まれている施設だろうと。

ただし今後を見据えたときの話としては、また違う部分はあるというふうに、私どももそういう論議をずっとしていたところでありませう。

○議長（堀江 政武君） 6番、脇本啓喜君。

○議員（6番 脇本 啓喜君） 今待機者がいるから、まず特養をとということでしょうが、これはつくってもつくっても待機者は出てきます。この待機者として手を上げている人が少なくなる方向っていうのは、こういう通所施設とかレスパイト施設をつくることで、その施設に入所したいという人も減ってくるんです。

体制づくりを早くすることで、この特養とかをつくる数も減ってくるはずでせう。少なくとも同時並行的に行っていくよう要望して、本日の質問は終わりたいと思ひます。

以上でせう。

○議長（堀江 政武君） これで6番、脇本啓喜君の質問は終わりました。

○議長（堀江 政武君） 暫時休憩します。再開は2時15分からとします。

午後2時00分休憩

午後2時14分再開

○議長（堀江 政武君） 再開します。

15番、大浦孝司君。

○議員（15番 大浦 孝司君） 3日間の一般質問の最終でございます。今回の一般質問は、年長議員のパワーが、非常に元気があったというふうな思いでございます。

私は、そういうふうな今回は、対馬の将来が非常に人口の激減という言葉で申し上げますが、このことと、将来、対馬はどうなるか。この島を背負う青年は、どのように今後、しっかりこれ

を育てていくか、ここらを教育長とじっくり今後の対馬を語ってみたいと、かように思っております。

まず、3月の1日の長崎新聞、これは共同通信社が全国の首長を対象に、1,788名の首長に対しアンケート調査を実施しております。これは1月から2月の間の2カ月間。

主なこのアンケートの内容は、将来、地方自治体がこのまま人口減、そして地方財政の難局が押し寄せる中、このままいけば、自治体の消滅が起こり得るであるというふうなことをアンケートの対象にしております。

その結果、77%の市町村長の皆様が、先は、私の町もそのようなことになるかもしれない、なるだろうというふうな危機感を持っているそうでございます。そのことが書かれております。

ただ、その対応をどうするか、これは残念なことに、国の支援をお願いするにとどまっております。現在、国の借金は1,000兆の累積の債務を抱えております。そのような将来の中で、さらに国の支援を求めていくということが、私はできにくいただろうと、このような展開は先々、細い自治体の行方が待っておるんじゃないかと、そのように危惧しております。

それから、本県、長崎県の実情でございますが、19の市町の首長のアンケート結果では、9割が危ない、自治体が破綻することになりかねない、このような数字が出ております。

特にその中でも、離島、壱岐・対馬・五島、そして半島と書いていますから、島原半島のことを含めてのことだと思いますが、特に懸念をしておると。間違いなくそうなるであろうという将来の予告を、首長さんの直接の答えを出しておるといふふうに新聞社は記載しております。

そのことを背景に、ただいまから一般質問に入ります。

通告に従い、市政一般について質問を行います。

対馬市による将来の人口推計資料では、2010年、3万4,407人の人口から2025年には2万2,705人、さらに2035年には1万5,718人に減少していく傾向となっております。

資料の算出は、出どころは、九州経済調査会となっておりますが、今後、特別な島の活性化が進まない限り、このような事態になるのでありましようが、ここまでこの対馬が落ち込むことは、大変な私は驚きを感じております。

この人口減少に歯どめをかけるには、大人社会の大きな変貌があり、経済の活性化が強力に進められ、同時に、魅力ある島づくりを目指す一方、将来の対馬を背負う少年、青年の育成が極めて重要と思われまます。

対馬市といたしまして、将来、対馬に残ろうとする者やUターン希望者を含むものに対し、どのような形で接触をしているのか、これがなければ、今後、新しい取り組みの構想等があれば、教育長の御意見を賜りたいと存じます。よろしく申し上げます。

○議長（堀江 政武君） 教育長、梅野正博君。

○教育長（梅野 正博君） 大浦議員さんの御質問にお答えいたします。

対馬市の人口流出は、ただいま御指摘がありましたように、大きな問題として受けとめております。対馬市教育委員会は、対馬市教育努力目標に、地域教育資源の活用と生涯学習を通じた地域教育力の再生を掲げ、その中で郷土を愛するつしまっ子の育成に力を注いでいます。

このことができれば、郷土を愛するつしまっ子の育成ができれば、対馬に残ってもらえる若者が増えるだろうし、または、将来は、対馬に帰ってきてもらえる方々が増えるだろうと、このように考えます。

その郷土を愛する子供たちの育成の手だての一つとして、各学校では、総合学習の時間等を使って、対馬の自然・歴史・文化・産業について、体験活動を取り入れた地域学習に力を入れております。

学校の中での学習だけでなく、学校から出て、校区にある人・物、事を調べたり、体験したりして、みんなで力を合わせて学習したことをまとめて発表をしているところです。その過程の中で地域のすばらしさを再確認し、地域に対する誇りと愛着を持つことができています。

1つの例として、厳原中学校でイノシシや鹿の被害や対策についての学習や、イノシシ、鹿の皮革を使った筆箱や小物入れの製作を行っています。これは、農林・しいたけ課有害鳥獣対策室が主管する対馬いとなみ協議会と連携した取り組みです。

また、この学習をした有志の生徒が、この対馬いとなみ協議会で行われた座談会、「考えよう！T s u s h i m aの農林業とくらし」に参加して、将来の対馬の営みについて大人に交じって話し合いや発表をしています。

この各学校の地域学習を27年度からは対馬市ケーブルテレビのつしまテレビ学習塾、今、算数・数学について番組を放映しておりますが、その枠の中で、1つの番組として放送しようと考えております。

子供たちの地域での活動と、それぞれの校区の自然、歴史、文化、産業も紹介できるのではないかと期待をしております。

取り組み2つ目として、従来から行われているこうした地域学習や環境教育に加え、今後は、将来も幸せに暮らせる社会づくりの視点を持たせるための教育へとレベルアップを図りたいと考えています。

そのために、学習課程の中で、いろいろあるんだという多様性、一人一人大切にという公平性、全てが関わり合っているんだという相互性、力を合わせてという連携性、資源に限りがあるんだという有限性、自分がやるべきことを人任せにしないという責任性、この6つの考え方を取り入れていきたいというふうに思っております。

これは、最近、国も言っているようですが、E S D教育と言われていています。これにより、これまで以上に対馬の将来性に夢や希望を持ち、主体的に地域に関わろうとする児童生徒を育てていきたいと思えます。

この学びは、対馬市が進める環境基本計画の推進と密接に関係したもので、市民協働・自然共生課やしまづくり戦略本部、島おこし協働隊との連携も進めていきたいと考えています。

また、環境基本計画のもと、市内の学校にまきストーブの導入も呼びかけています。木のぬくもりを感じながら、対馬の木材資源の有効活用や自然エネルギーの大切さを学ぶ機会につなげたいと考えています。

3つ目ですが、しまづくり戦略本部が主管している、こども未来塾事業です。この事業は、子ども夢づくり基金を活用して行っております。これは、域学連携事業の一つで、島外の大学生や大学院生と小中学生が交流する事業です。本年度は、上対馬、上県地域をモデルにして、大学生が夏休み子どもたちの学習を支援する、子ども寺子屋が実施されました。来年度は、島内3カ所での実施が計画されていると聞いております。

島外の学生の方々から、外から見た対馬のよさ、魅力などを話題にして、そのことを子どもたちが聞いて、郷土に誇りを持ってくれればと期待をしているところです。

4つ目といたしまして、郷土学習の資料の充実ということを考えております。小学校社会科副読本が7年前にできておりますが、これを今回、リニューアルして、先ほど改訂版が完成をいたしました。小学校の3・4年生を対象にした社会科副読本です。

2つ目ですけれども、中学1年生の社会科資料を学校の職員による社会科部会等がつくっていただいているものがございます。これの活用も考えております。

それから、つしまっ子郷土読本事業ということで、26、27年度、取り組んでいるものがございます。この読本が完成しましたら、また有効活用を図り、子どもたちに対馬の魅力を学習してもらいたいというふうに考えております。

以上です。

○議長（堀江 政武君） 15番、大浦孝司君。

○議員（15番 大浦 孝司君） どうもありがとうございました。

部長さんでも結構ですが、26年度の生徒、中学3年生の卒業する中での進路、これはどのようになっていますか。これ、ちょっと実態の数字をお尋ねいたします。

○議長（堀江 政武君） 教育部長、豊田充君。

○教育部長（豊田 充君） お手持ちの資料がありますので、資料に基づいて説明したいと思います。

平成26年度の中学校の卒業、一応見込みということでございますけれども、対馬市全体で

172名でございます。

そして、県外の高校に行く児童が29名、そして進路未定が3名ということですね、対馬合計。
あと詳しい内容はよろしいですか。

○議員（15番 大浦 孝司君） いやいや全部。

○教育部長（豊田 充君） 全部ですか。

○議員（15番 大浦 孝司君） はい。だから、いや、172名の内訳。

○教育部長（豊田 充君） 高校別に言いますか。

○議員（15番 大浦 孝司君） いやいや。

○教育部長（豊田 充君） いいですか。

○議員（15番 大浦 孝司君） 結論は進学、就職が、数字が。だから島外の進学は29で。

○教育部長（豊田 充君） 29で就職はゼロ名です。

○議員（15番 大浦 孝司君） ああ、ゼロですか。

○教育部長（豊田 充君） はい。そして進路未定が3名ということで、それを差し引いた
140名が島内の高校という形になります。

○議員（15番 大浦 孝司君） わかりました。

○議長（堀江 政武君） 15番、大浦孝司君。

○議員（15番 大浦 孝司君） そしたらお尋ねしますが、その外に行かれた、進学というふう
なことで理解しますが、この子どもさんたちの先々の対馬市教育委員会として、どのような形で
進学したかというふうなことは把握されていますか。

つけ加えます。進学の中で、ただの進学なのか、あるいは先々は対馬にも戻るようなことを把
握された形の、対馬市はどのようにそれを把握していますかということをお尋ねします。

○議長（堀江 政武君） 教育長、梅野正博君。

○教育長（梅野 正博君） ただいまの御質問ですけれども、公立、私立、いろいろ行く先はありま
すけれども、その高校を卒業してからどうだったということの追跡調査ですか、追跡調査になる
んですか。

○議員（15番 大浦 孝司君） だから、行く前の段階で。

○教育長（梅野 正博君） いや、行く前の段階では、そのことは資料もありませんし、はっきり
した数字はないと思います。

○議長（堀江 政武君） 15番、大浦孝司君。

○議員（15番 大浦 孝司君） 教育長、私は、今までのあり方はそれでよかったかもしれない
が、今からの数字というのは、後継者が対馬におらんという数字なんですよ。ですね。

それで、その子どもさんらが最後に進学するけどもどうするんだというふうな方向の、やはり

市の教育委員会で、進学される子どもが、将来、対馬に帰ってくるような子がおるだろうかというふうな数字の把握をしようとするのがない限り、中学を卒業した時点で、さよならということになるんじゃないでしょうか。

私が問うているのは、先に対馬に戻るような子が、その中に何人おるかなということ把握しようとしておるのかということなんです。それを変えないと、今まではいいにしても、今から変えないと、この島は廃れます。それについて、今から先の思いがあれば聞かせてください。

○議長（堀江 政武君） 教育長、梅野正博君。

○教育長（梅野 正博君） 進学して、その後の対馬に帰ってこられるか、それともっていうことについては、単なるアンケート形式であればできるかもしれませんが、子どもたちの将来の人生設計でありますし、そのことについて、今までは調査は、各学校はわかりませんが、教育委員会としては調査はしておりません。

この後も、このことは慎重にやはり将来のことを私たちも心配はしておりますけれども、子どもたちが帰ってこられるか、それとも向こうにもう住まうことになるのかっていうのは、ちょっと慎重に考えてみたいと考えております。答えにちょっとなってないかもしれませんが。

○議長（堀江 政武君） 15番、大浦孝司君。

○議員（15番 大浦 孝司君） 経済情勢が対馬の中は厳しい、就業情勢も厳しいことはわかっているんです。しかし、それでもいろいろな理由で親のその面倒を見る、家庭のその経済を助けるような、やはりそういう方もおるかもしれませんが、問題は、高校の段階が、いわゆる最終的に判断するというふうなことが数字的に出ています、要は進学ですから、全員。

ここに、中学卒業前提の中で、市の教育委員会の把握というのは、私は追求していくようなことが、今後、ないと非常に子どもがこの島にとどまらないと。残ろうとする心があれば、これは連携をとるべきであろうと私は思うんですが、教育長は、そういうふうなことはどうお感じになりますか。

○議長（堀江 政武君） 教育長、梅野正博君。

○教育長（梅野 正博君） 中学を卒業していく生徒、特に島外の高校等に進学をする生徒について、私たちが心で思っていることは、皆さん、対馬に残って対馬を盛り上げていただきたいという事は考えているんですが、やはり最終的に決定するのは、本人であり保護者の方であるというふうに思います。

今後、対馬市がどのようなことに力を入れて、義務教育等に取り組んでいかなければいけないことかということについては、卒業する子どもさんたちの感想とか思いとかそういうものを各学校で聞いてもらう。

その中から、今後、対馬の義務教育はこのように気をつけていきたい、力を入れていき

たいというような方向でも教えてもらえば、それはありがたいと思いますが、対馬市の教育委員会が、そのようなことまでアンケートをしたり、または気持ちを伝えたりするということは、これは慎重に取り組んでいきたいというふうに思います。

○議長（堀江 政武君） 15番、大浦孝司君。

○議員（15番 大浦 孝司君） 自分の人生ですから、それを誰かによって束縛・強要するようなことは、私もそういうふうなことはわかりませんが、何を言っているかというのは、将来の島に残ろうとする、残る気持ちのある方々の思いを地元の教育関係の皆様は、最後まで、私は把握しながら育てていくべきであると、このように思っているんです。

それで、教育長と今、かみ合いませんが、ある事例を申し上げてみたいと思うんです。これは又聞きで、私も現場に行って確認はしておりませんが、島根県の海士町の実態は、平成の大合併をあえて拒否をしまして、自治体の独自の運営を変えていったそうでございます。

当然、合併交付金はゼロであります。緊縮財政は当たり前でございます。それが2002年ぐらいからスタートして、時の首長の給料を半分に、ほとんど職員の給与も3割ぐらいカット、議会も一緒であったそうです。

その中で、将来、この島に残る子どもをどう育てるかというふうなことで、大人の社会も変わる。子どもの育成をここが一番大事なところでありまして、市の教育委員会が、県立高校とタイプアップして、子どもが島に戻るような思いがあれば、ここを何とか力を入れまして、戻ってくる仕組みをつくろうと組んでおるんですよ、提携して、提携といいますか話し合いの中で。

いきなり残せじゃなくて、力をつけて帰ってこいというふうなことをやることを市の教育委員会が、当初から、その子どもさんの意思を把握しながら、島に残る志のある人間を何とかしてとどめたいと、このような取り組みをして、現にその姿が成功しておる事例も聞いておりますが、対馬市もまねするんじゃないかと、そのような心意気を示す気はないかということをお聞きしているんですよ、あなたに。

あなたの場合、ないということでありました。今まではそうあっても、（発言する者あり）ああそうですか。

今からは、そのようなことで、志のある者は最後まで把握しながら育てていく、私はこれが不可欠と思っておりますが、ありましたら答弁ください。

○議長（堀江 政武君） 教育長、梅野正博君。

○教育長（梅野 正博君） 質問の意味を正確に捉えていなかったと思います。

私も、この質問の通告を見せていただいて、どういうことがテーマとして話の中心になるのかなということをお聞きして自分なりに考えてみました。

その中で、私ですね、これはもう個人的な考えが多いのでお断わりをしておきますが、これま

で体験学習は、学校教育の中で、教育課程の中で総合学習という中に位置づけてやっております。

したがって、専門的なこととか危険なことなどについては、できるだけ安全な方法を考えながら取り組んでいるところでございます。

私が考えたのは、それを1歩、レベルアップをさせて、林業、それから漁業、畜産、土木・建築、この中に、土木の中に石積みも考えているんですけども、対馬の中には、このようにいろいろの宝があります。これを活かした、やはり若者の生き方っていいですか、そういうものを視野に入れながら、学校が教育課程の中では無理だけれども、関係団体の方々によって、例えば林業であれば、間伐などの現場を中学生、高校生に見せてもらう。

それは、学校ではなくて、土曜か日曜か休業日に、希望者を募って、その関係の団体の方がお世話をしていただいて、体験、実際にやれるところはやってみる。

そういうふうには、実際の現場を見た子どもたちは、ああ、これはやりがいがあるぞと。対馬にとっては、これは大事な産業だというようなことが理解できるかもしれませんので、そういう方々が、将来は対馬に戻って、幸い自分の家にも、そういう山とか船とか土地もあるというふうなことになるれば、そこで考えが固まっていくのではないかなというふうに思っておりますので、全くこれは具体的に進めているのかと言われれば、そうではありませんけれども、今までの体験学習を1歩進めた、そういう対馬の魅力を体験してもらって、向こうに高校、まあ大学もあるでしょう。行って、またUターンをしてもらうということは、どうかなというふうに自分の中では温めています。

○議長（堀江 政武君） 15番、大浦孝司君。

○議員（15番 大浦 孝司君） この人口の推移ですが、私もこれ、見たときにびっくりしたんですが、2010年、今、平成27年ですが5年前の数字ですよ、5年前、巖原町が1万2,684、これが、今から25年後です。5,394ですよ、巖原町が、5,000ですよ。美津島町、7,841が4,639、豊玉町、3,700が1,621、峰町、2,296が981、上県、3,505が1,307、上対馬、4,335が1,857、1万5,798です。これは壊滅的な島の姿、壊滅とは言いませんが、集落単位の編成ができにくい島になってしまう。

ただ、大人の社会は、活力ある産業の形成を自治体も総力で取り組み、これ、やります。やりますが、一方では、残ろうとする子供の意思をどう大きく育てるか、これは教育の課程で、親と本人、それから学校、教育委員会、この3つは、もう少し逆に慎重な姿勢をとらないかところも、私はあるんじゃないだろうか。

島がだめやから本土に行きなさい。いい学校に行って、いい仕事につきなさい。これが一般的な教育指導者の言葉であったような気がします。

いや、教育長、違うですか。（発言する者あり）そうですか。そんなら、残るような現実の、やはり熱のあった指導が最後にこうなったというふうな事例をつくるのが、私は1つの取り組みだと思いますが、いかがですか。

私は、そういうふうに今までの教員のあり方、学校、学習を高めるが、島を将来的に思う子供が果たしてできたかなと、少し疑問を持っていますが、教育長、もしそこが反論があればお願いします。

○議長（堀江 政武君） 教育長、梅野正博君。

○教育長（梅野 正博君） 教育界はという今、お話がありましたけれども、私は、今現在、対馬の小中学校で5割以上の地元の職員で占めております。

これまで、どういうことを現場で教えてきた、私もその一員でしたので、全部を理解して言うということにはならないかもしれませんが、やはり対馬を元気にする、対馬の中で物事を回して生活ができる、そのようなことは、各学校、一生懸命取り組んでおります。

ここ数年、特にそういう意識が高まって、総合学習の中では、小学校では、9割以上の学校が、96%でしたか、私、ちょっと計算したんですが、地域の学習を取り入れた総合学習をしています。

中学生になりますと、進路とか平和とかそういうことに時間も使いますので、6割ぐらいかな、中学校は62%の学校が地域学習をしている。あとの4割程度は、ほかのことを入れてはおりませけれども、ここ数年来の学校、小中学校においては、対馬を知ろう、対馬のよさを知ろうということで、しっかり取り組んでおります。

先ほど幾つか私も手だてを言いましたけれども、その手だての中も、4つ言ったことも、そのことに何とかつなげたいという気持ちはいっぱいあります。

高校は島外がいいよとか、職場は向こうがいいよとかいうことは、それはあつてないと私は信じています。

いいでしょうか。

○議長（堀江 政武君） 15番、大浦孝司君。

○議員（15番 大浦 孝司君） 教育長、中学段階での地域学習を取り入れるとか、それはわかるんですけども、それで将来、対馬に残るといふような決断や根拠にはならんとですよ。

要は、力をつけて帰ってくるような仕事、もしくは、即仕事が1次産業に従事とかありますけれども、そこらの先を見つめた中で本当の教育というのは、進学した高校の先にあると思うんですよ。それからその先にまたあると思うんですよ。

それを一活して教育委員会が、やはり確実に戻るような子がおるならば、よくよく把握しながら、高校と連携しながら、私はそういうふうなことをつくり上げる必要があると、このような方向を変えるべきだといふふうな思いがあるんですよ。そこらについて、いきなり言われてもわか

りにくいでしょう。

例えば、私は教育部長に、そういう事例を、おまえ、勉強してこいと。こんなに実態があるならば、そういうようなことを今年度前半にそういうことを対応されて、何が一番不可欠なことになるのか。これは、そういうふうな研究をする必要が私はあろうと思いますが、部長でも結構ですが、いかがでしょうか。

私は、率直に前線にいるあなた方の意見を聞きたい。お願いします。

○議長（堀江 政武君） 教育部長、豊田充君。

○教育部長（豊田 充君） 小学校、中学校、高校、この連携した学習というのは、私も必要だというふうに思っております。

一例としまして、一昨年ぐらいから、対馬高校の学生が、商経部が主となっておりますけども、自分たちで対馬の食材、歴史、文化を網羅した冊子等を2冊、これもボランティアでつくっております。

ですから、今後においては、この高校という対馬島内の最高学部で、小学校のとき、中学校のときに経験、体験したものを、そこでまた活かし、そして上部の大学に行くときには、その辺の対馬の思いを持ったものを勉強して帰ってきてもらおうと、そのようなやはり小学校からの中学校、高校の連携した教育プログラムっていいですか、そのようなものは、高校のほうにも、どんどんお示しをし、やっていきたいなというふうに思います。

それと、教育委員会とまた市長部局のほうでも、このまた域学連携という事業を昨年からは始めております。これも、願えば高校まで一貫したテーマを持ちながら、子どもたちが地域の宝をどう磨いて、どうこれを活用していくのか、その辺に教育現場としても一生懸命取り組んでいきたいなというふうに思います。

それと、先ほど私、中学生の進路関係で報告しましたが、少し時間をください。少し間違っておりました。済みません。

卒業者は294名の予定です。そのうち進路未定が3人で、高校進学が291名、そのうち島内の進学者が218名、島外が73名、この73名のうち島外ですね、島外の公立高校に34名、そして私立に29名ということで、中学校における島外流出者は約25%の中学生が、今、島から出ているということです。

それと同時に、高校の卒業ですけども、今年度は一応、島内に28名前後が残るということで聞いております。昨年までは、これは20名でしたので、島内に残って働きたいという学生がやはり増えたことは、私は、結果としてはいいのかなと、この結果がますます上がるように、教育委員会としても頑張っていきたいなというふうに思っております。

以上です。

○議長（堀江 政武君） 15番、大浦孝司君。

○議員（15番 大浦 孝司君） まさにそういうことを期待しております。今からの時代は、今までとは違うと思います。そういうふうなことで、これは、私も予算の参考資料の中から、ことしの27年度の新しいといいますか、なかなかいい事業を取り組んでおるなというのを3つほど見ております。

こども未来塾事業、これは先ほどございましたが、これ。それから、対馬農林水産担い手林業女子人材発掘事業とか、それから21世紀漁業担い手確保推進事業とか、これらの事業というのは、これは非常に子どもさんに、もしその高校の段階でも結構ですが、どっちにしようか、島外に行くのか地元に戻るかという中で、私は学校にこういうふうなことは勧めてお知らせすることを私はしてほしいと思うんですが、担当、これ議長、きょうは教育委員会にしていますが、特にこの3つの中で、水産の問題を、これを私は、かなり学校の段階で、これは高校ですけども、紹介してもいいと思うんですが、そこらあたりはどのようにお考えか、参考的に部長の意見を聞かせてください。

この21世紀漁業担い手確保推進事業、ここらは私は、非常に前向きな取り組みでいいと思うんですよね。そこらを大人の社会じゃなくて、学校の中でどんどんPRをするべきと思うんですが、その辺どのような取り組みか、部長さん、お願いします。どういう計画ですか、これ。

○議長（堀江 政武君） 通告はしておりませんが、答えられれば部長、いいですか。

○議員（15番 大浦 孝司君） 参考意見です。

○議長（堀江 政武君） 農林水産部長、阿比留勝也君。

○農林水産部長（阿比留勝也君） その件につきましては、当初予算の説明のときだったと思いますが、今後、PRの仕方、それと募集の仕方について研究をさせていただくということで、前向きに検討をしていきたいというふうに考えております。

○議長（堀江 政武君） 15番、大浦孝司君。

○議員（15番 大浦 孝司君） それと、先進事例の話も、私も電話である方とお聞きしたんですが、子どものその教育というのは、人間的な成り立ちを強く基礎を教えるような塾をやるんだと。このような取り組みを聞いております、海士町の場合。

私は、こども未来塾事業が、これが教育委員会のほうで把握しておれば、どのようなその塾の内容なのか、把握しておればお聞かせください。

そして、この実施箇所が3カ所とか言わずに、全島をまたがったようなことが必要ではないかと思いますが、ここらについて、そういうふうなことが、担当部のほうはできないかというふうなことでお尋ねしたいんですが、これはちょっと教育部長のほうに、まずは。

○議長（堀江 政武君） 教育部長、豊田充君。

○教育部長（豊田 充君） こども未来塾ですけども、ちょっと済みません、資料を。主管課はしまづくり戦略本部ですけども、その資料に基づいてちょっと説明をさせていただきます。

進学塾、予備校、家庭教師といったものがない対馬で、学生の力を借り、離島の教育格差を解消、学習だけでなく、外部視点によりふるさと対馬のすばらしさを知る、そのことを次年度、27年度は島内3カ所ぐらいで開催するという運びということで聞いております。

○議長（堀江 政武君） 15番、大浦孝司君。

○議員（15番 大浦 孝司君） 教育委員会と担当部署が違いますが、このような企画は、もっと箇所を広めて実施をするようなことを、お願いを担当部署のほうにはいたしたいと希望いたします。その回答は結構です。

先ほど、私は、海士町の事例を発表しましたが、これは産業を進める市長部局のほうに御意見を聞いていただきたいんですが、どうせ今のことをやっていけば、先々、だめになるだろうというふうなことを変えていこうとする島全体のことが、お聞きしました。

その中で、やはり構造を変えるということは、役所のやり方もみずから、腹を、本当にこの人たちはやる気があるんだなというふうな、市民の思いがないと変わらないという言い方でございました。

ですから、私は、予算面を見ましたら、今から、この島を変えていくんだ、変えようとするような事業の取り組みは何カ所か見えます。それが数字の上での計画じゃなくて、担当部署が「これを失敗すれば自分が責任取ってでも」というような意気込みを市長部局には持ってほしいと、かように思います。

大人の世界が変わると同時に子どもも変わっていかないと、この島は1万5,000ということになりますが、ならないようにするのが行政であり、今生きる我々の責任でございます。

私はその子どもを預かる教育委員会に義務教育以降の行方をしっかり把握されて、人に対する金の、いわゆる使い方、この10年以内が勝負です。しっかりやってほしいと思います。

そして、豊田部長に海士町の事例を1回研究させるように、教育長、そういうふうな取り組みを1回させてください。そして、また意見を聞きたいと思います。

これで、私の一般質問を終わります。

○議長（堀江 政武君） これで、大浦孝司君の質問は終わりました。

○議長（堀江 政武君） 以上で予定の……（「議長、発言の許可を求めます」と呼ぶ者あり）これ終わってからで……（「いえいえ、終わらないほうがいいですよ」と呼ぶ者あり）——はい、どうぞ。10番、波田政和君。

○議員（10番 波田 政和君） 会議規則52条の2項に基づき、発言をしたいと思っております。